＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

京教竹友会竹の可能性を掘り起こせ！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要など

１．京都教育大学竹友会では 2017 年 5 月～12 月まで研究活動を行った。

活動目的

京都教育大学内の放置竹林の整備

竹林整備により発生した間伐材他の利用の研究

竹を用いたものづくりの研究・実践

学内団体・地域自治体との連携

プロジェクトの詳細

２．代表者および構成員

・代表者

河合　弘明	技術領域専攻	３回生

・構成員

宇佐　光李	発達障害教育	３回生
奥村　結実	発達障害教育	３回生
神田　優佳	発達障害教育	３回生
貞永　澪音	理科領域	３回生
渡邉　開	社会領域	３回生
黒木　識	技術領域	３回生
櫻井　孟宗	技術領域	３回生
服部　泰久	技術領域	３回生
東谷隆誠	発達障害教育	２回生
合川勇歩	技術領域	１回生
木原 菜穂美	技術領域	１回生
田中美帆	技術領域	１回生
菱刈瑞希	技術領域	１回生
元井和希	技術領域	１回生

３．助言教員

土屋　英男（産業技術科学学科）

４．協力団体と協力者

京都教育大学附属京都小中学校

京都教育大学附属桃山中学校

大阪府立園芸高等学校環境緑化科

浜田　真理　本学国文学科教授

南山　泰宏　　本学環境教育実践センター専任教員

林　禎之　　映像クリエイター

第２章　内容や実施経過など

１．竹林整備

期間：一年中

京都教育大学内に広がる約 350 ㎡の竹林は、前年度の竹友会の活動により人が入ることができる程度に整備された。しかし、依然枯れ竹や雑木により薄暗く、風通しも悪かった。竹林を健全な状態に近づけるため、雑木の剪定をして竹林内の風通しを良くした。また、民家に近いフェンス際に竹が密集していたため、間伐を行った。年間を通して竹が密集している場所の間引き間伐や穂先の処理を行い竹林の整備を行った。間伐した竹は竹灯籠や竹馬、門松等竹を利用した研究・実践活動の材料とした。

２．七夕イベント

期間：6 月下旬～7 月中旬

（1）　前年度に引き続き日本文化である七夕を本学学生だけでなく教職員の方にも体験してもらうために、竹林整備において出た間伐材を用いて 6 月下旬～7 月中旬まで学生課フロア、生協購買に笹飾りを設置して、短冊に願い事を書いてもらった。笹飾りだけでなく間伐材を用いて「かぐや姫なりきりセット」（写真 1）を製作した。

写真 1

（2） 七夕のシーズンに合わせて催される軽音部とフォークソングサークルのライブの七夕装飾を行った。軽音部のライブでは笹飾りとかぐや姫なりきりセットを設置した。フォークソングサークルのライブでは、軽音部で設置したものに加え、祇園祭の斎竹をイメージした装飾（写真 2）を設置した。これまでにない装飾にライブ期間中は多くの人が訪れ、短冊に願い事を書いたり、かぐや姫なりきりセットで写真撮影をしたりするなど盛り上がった。

写真 2

（3）留学生の方に日本の夏の風物詩である「流しそうめん」を体験してもらうために、７月６日に国際交流サークル FIRA と連携して流しそうめん大会と七夕企画を行った。（写真 3）流しそうめん大会では高さ約３m、長さ約８mのレーンを設け、そうめんや飴玉、フルーツなどを流した。その後、短冊に願い事を書いてもらい、笹に飾った。竹灯籠のミニライトアップも行い、昨年度に比べより季節感を感じてもらえる企画となった。

写真 3

３．藤森盆踊りフェスティバル出展

期間：８月６日

８月６日、藤森神社にて藤森連合自治会主催の藤森盆踊りフェスティバルが開催された。5 月ごろより毎月連合自治会の方との打ち合わせに参加し、地域の方と協力して藤森盆踊りフェスティバルの運営企画を行った。前年度は西福寺幼稚園の園児、藤森小学校の児童が作った紙灯篭とともに参道の付近で紙灯篭と竹灯籠のコラボレーションをしたが、本年度は参道入り口一帯に竹灯籠ライトアップを実施した。（写真 4）盆踊りフェスティバルに用いた竹は竹林整備により出た間伐材を用いて竹灯籠づくりを行った。竹灯籠づくりには竹友会のメンバー以外に学内で竹灯籠づくりのボランティアを募集して技術領域、社会領域、発達障害教育専攻等様々な領域の学生に竹灯籠づくりを体験してもらった。藤森盆踊りフェスティバルの様子は前年度に引き続き伏見経済新聞にも取り上げられ、当日は約２５００人が訪れ大変な盛り上がりを見せた。

写真 4

４．環境教育実践センター流しそうめん

期間：７月２２日

毎年、農業実習Ｉの最終授業前後に環境教育実践センターで収穫した夏野菜を食べたり、演奏会を開いたりなどミニパーティーが催される。このパーティーに流しそうめんを出展した。（写真 5）また、普段環境教育実践センターにあまり訪れることのない学生を誘い、環境教育実践センターの活動を知ってもらう機会を設けた。

写真 5

５．京都聴覚障害児放課後等デイサービス「にじ」でワークショップ実施

期間：8 月 23 日

本学の教育学専攻 4 回生の方と協力して京都聴覚障害児放課後等デイサービス「にじ」へ竹オブジェづくりのワークショップを行った。イベントを実施するにあたり、京都聴覚障害児放課後等デイサービス「にじ」の職員の方との打ち合わせに加え、自己紹介や作業の説明ができるよう簡単な手話の取得を目指し手話講座や竹オブジェづくりの映像撮影なども行った。

当日は竹友会から 3 名が参加し、小学校 1～6 年生の児童 20 名弱を対象に、作り方を指導した。そのなかで、竹友会の活動の様子や作り方の紹介をスライドの上映により行った。

オブジェは、2cm に切った竹に和紙を貼り、たこ糸で繋ぐというものであった。（写真 6）事前に竹を切って準備していき、児童は竹にきりで穴を開ける・はさみで和紙を切る・絵を描く・たこ糸で竹を繋ぐという作業を行った。また、竹のオブジェに加え竹のぶんぶんゴマづくりも行った。職員・スタッフの方が分からない児童について教えてくださったこともあり、予想していたよりもスムーズに完成させられる児童もいた。児童は家族の似顔絵やお菓子など、それぞれ好きな絵を描いており、楽しそうな様子を見ることができたことが収穫と考える。早く完成させられた児童のために、ぶんぶんごま作りも用意していたため余った時間を有効活用することができた。

写真 6

６．城陽緑化フェスティバル

期間：9 月 31 日～10 月 1 日

近畿大学学生団体近畿大学農学部ＦｅｅＬｉｎｋと協力して木津川運動公園に全高約８ｍの竹のブランコを出展した。（写真 7）9 月 31 日に木津川運動公園付近の竹を切り出して設営場所に運搬した。今回は竹友会として出展したのではなく、竹の切り出し方、さばき方や設営の仕方などを教える技術提供

という形で連携した。

写真 7

７．藤陵祭竹ブランコ

期間：11 月 10 日～11 月 12 日

藤陵祭前日の 11 月 9 日に間伐も兼ねて竹を切り出し、11 月 10 日午前に設営作業を行った。(写真 8) 藤陵祭初日は平日のため本学学生が多く訪れた。11 月 11 日、11 月 12 日は多くの来場者でにぎわい、竹のブランコを多くの人に体験していただいた。竹のブランコは初めて乗る子どもが多く、何度も繰り返し列に並び乗っている子どもも多かった。保護者も乗ったことがない方が多かったため、親子ともに楽しむ姿が見られた。３日で延べ４００人が竹ブランコを体験し朝から夕方まで多くの人が訪れた。また竹友会メンバー以外に甲南大学や、龍谷大学から環境教育に興味のある学生が数人スタッフとして参加した。

写真 8

８．ミニ門松作り

期間：12 月 6 日、12 月 14 日、12 月 23 日、12 月 24 日

（1）京都教育大学附属京都小中学校ミニ門松づくり

12 月 6 日京都教育大学附属京都小中学校（以下附属京都小中学校）の 7～9 年生 D 組を対象にワークショップ形式でミニ門松づくりを実施した。11 月末からミニ門松に用いる材料を竹林から切り出して斜めに切って加工し、植栽に用いる植物材料の選定を行った。また附属京都小中学校で技術を教えている先生と協力して楽しく体験的な学習になるよう授業内容を打ち合わせるなど授業づくりを行った。

授業でははじめに竹友会の説明、門松の説明をスライドショーを用いて行った。斜めに切った竹を選び、テープで固定した後、折り紙で扇や凧を作り、最後に植物を飾った。（写真 9）準備した植物以外にも学校内に生えているスイセン等も用いて 1 人 1 対のオリジナルミニ門松を作った。

写真 9

（2）留学生向けミニ門松づくり

12 月 14 日に留学生の方を対象に、日本の正月飾りである門松を作り、ものづくりの楽しさを体験してもらうと同時に、日本の文化を知ってもらうことを目的として国際交流サークル FIRA と連携しミニ門松作り講座を行った。スライドショーを用いて日本の伝統文化である門松を説明した後、京都教育大学内にある植物を用いてミニ門松作りのワークショップを行った。（写真 10）

写真 10

（3）環境教育実践センターミニ門松づくり

12 月 23 日に環境教育実践センターでミニ門松づくりを実施した。本学公開講座「幼稚園での草花・野菜の栽培のための実技講座」を受講している方と「野菜や草花を栽培して育てる楽しみや不思議さ、大切さを学習する体験教室」を受講している方を対象にミニ門松づくりの希望者を募ったところ 10 組の参加者が集まった。

京都教育大学の竹林から出た間伐材と環境教育実践センター内の植物を用いたオール京教産ミニ門松づくりを体験していただいた。イベントには親子での参加が多く、親子でミニ門松を作る姿が見受けられた。（写真 11）

写真 11

（4）子どもと川とまちのフォーラムミニ門松づくり

京教竹友会助言教員の土屋英男（産業技術科学学科）教授が理事を務めている NPO 法人子どもと川とまちのフォーラムのイベントとして 12 月 24 日にミニ門松づくりを京都教育大学 F12 講義室で行った。竹友会メンバー4 人と保護者、子ども含む 6 組がイベントに参加した。

内容はこれまでのミニ門松づくりとほとんど同じものだが、ナンテン、スイセン、ササ、アオキ、クロガネモチなど植栽に用いる植物を大学内を散策して、特徴や植物名の由来、門松との関係などを説明しながら実際に生えている植物を見て、植物の知識を体験的に学ぶ機会を設けた。（写真 12）

写真 12

９．門松づくり

期間：12 月 18 日～28 日

日本の伝統的な正月飾りである門松についての知識を深め、実際に作ることにより竹友会メンバーの技術向上並びに門松を実際に飾ることにより、竹友会の活動をより多くの方に知ってもらうことを目的に高さ約１７０ｃｍの門松を製作した。門松は本学藤森学舎正門、附属京都小中学校正門、京都教育大学附属桃山中学校（以下附属桃山中学校）正門、大阪府立園芸高等学校（府立園芸高校）正門・玄関入り口に設置した。本学学生が作るだけでなく附属京都小中学校、附属桃山中学校、府立園芸高校に協力していただき門松づくりを一緒に行う出前授業を実施した。

（1）附属桃山中学校門松づくり

12 月 22 日に附属桃山中学校で門松づくりの出前授業を実施した。附属桃山中学校へ門松づくりに参加する有志を募ったところ 3 年生の 3 名が集まり、地下足袋、庭木ばさみ、のこぎりなどの腰道具を身に着け､庭師が作業をする様子に倣って作業をした。マツやウメ、ナンテン、杉葉、ハボタン等門松に用いる植物の由来や縁起を説明した後、植物をどのように使うかは生徒の自由な発想に任せて植栽・仕上げ作業をしてもらった。(写真 13)

写真 13

（2）附属京都小中学校門松づくり

12 月 26 日に附属京都小中学校へ門松づくりの出前授業を行った。附属京都小中学校で門松づくりに参加する有志を募ったところ、8 年生 4 名が集まった。附属京都小中学校中高等部校舎正門に附属桃山中学校での門松づくりと同じように、地下足袋をはき、腰道具を身に着け、植物を飾る仕上げ作業を行った。(写真 14)

写真 14

12 月 25 日と 12 月 27 日に府立園芸高校へ門松づくりの出前授業を行った。府立園芸高校環境緑化科では樹木や草花を専門に扱う授業を通して、ランドスケープや造園について学んでいる。普段接する機会の少ない農業高校の現場を間近で見て、生徒と一緒に門松を作り上げることで、達成感やものづくりの楽しみを本学学生と高校生が共有することで学生が新たな発見につなげることを目的に門松づくり出前授業を実施した。府立園芸高校環境緑化科に門松づくりに参加する有志を募ったところ、2 年生 6 名、3 年生 3 名が授業に参加した。

府立園芸高校の生徒は普段に授業で樹木の剪定や竹垣の製作、造園競技大会への出場に向けた練習など専門的な実習を行っているため、附属学校での門松づくりとは異なり、竹の加工から門松づくりを始めた。また、設置する門松も関東風（写真 15)、関西風（写真 16)、ミニ門松（写真 17）の 3 種類として 3 つの班に分けて作業を行った。

竹の加工作業では竹にソギを入れる(斜めに切る)作業から行った。ソギを入れる作業では切り口がささくれないように鋭角に切るかが重要となる。加えて限られた本数しかないため失敗が許されないため、緊張感漂う作業であった。1 つ 1 つ丁寧に教えると生徒がコツをつかみ、材料を無駄にすることなくソ

ギを入れることができた。次に針金で3本の竹を固定し、傾かないようにバランスを見ながら動かないように鉢に固定した。ここまでは関西風、関東風の門松づくりでは共通の作業だが、袴づくりから作業の内容が異なるため分担して作業を行った。

関西風の門松の袴は割り竹に穴をあけて縄でつなぐ竹袴で、ドリルで穴をあけたり、縄でつないだり1つ1つ丁寧にしなければ完成しない作業であったが根気強く生徒たちは取り組み、コツをつかむとあっという間に袴を完成させた。関東風の袴は稲わらを鉢に巻いて編み込む作業があり、1対につき2人1組で稲わらを巻いて互いに協力して稲わら袴を完成させた。

最後にマツ、ウメ、ナンテン、ハボタン、杉葉を植栽して完成した。ミニ門松班は鉢に用いる竹の切り出しと、細い竹を切り、構内に生えている植物を用いて飾り結びをして完成した。12月27日の作業では時間が余ったため残った稲わらを用いてしめ縄づくりにも挑戦した。

写真 15

写真 16

写真 17

（4）藤森神社門松づくり

12 月 26 日に藤森神社へ門松を奉納した。（写真 18）去年に引き続き高さ約１７０ｃｍの門松を設置し、初詣の期間は多くの参拝客に見てもらうことができた。また近年訪日外国人の増加もあり設置期間中は多くの外国人観光客に門松を見ていただいた。

写真 18

（5）大学正門門松づくり

12 月 28 日に京都教育大学正門に門松を設置した。普通の門松を作るのでは面白くないと考え、10 本の竹を用いた「大笑い門松」（写真 19）を製作した。末広がりで縁起が良い扇も折り紙で作り、新年を迎える準備を行った。

写真 19

第３章　結果や成果など

１．竹林整備

１年間の竹林整備を通して、密集した竹の間伐や、雑木の伐採、枯れ竹の伐採、倒木、倒竹の整理することで前年度に増して風が吹き抜けて光が差し込む美しい竹林の景観になってきた。（写真 20）竹林に入りやすくなり、竹林内での作業の安全性も高まった。春のタケノコ掘りでは少量ではあるがタケノコを掘って下宿生に分けたり、たけのこご飯や煮物にしておいしくいただいたりした。

写真 20

２．七夕装飾

笹飾りだけでなく、近年流行りの SNS 映えを狙って作ったかぐや姫なりきりセットが人気となり、ライブ期間中は多くの学生が記念撮影をしている姿が見られた。国際交流サークル FIRA との流しそうめん大会でも留学生の方に興味を持っていただき、七夕、ながしそうめん、かぐや姫が登場する竹取物語について多くの日本文化を伝えることができた。

３．藤森盆踊りフェスティバル出展

藤森盆踊りフェスティバルでは、去年より規模を上げて藤森神社参道の鳥居周辺で竹灯籠ライトアップを行った。竹灯籠づくりに参加した学生は、はじめはどのようなものができるのか疑問に思って作業をしていたが、ミニライトアップをすると竹灯籠から漏れ出る光が作り出す景色に驚いていた。設営作業時は一時通り雨などにも見舞われたが、無事に竹灯籠を設置することができた。前年度は紙灯篭とのコラボという形で漠然と竹灯籠を置いただけであったが、今年はテーマを設けて、天の川を表現した光の川が流れる景色を作り、景色に意味を持たせることができた。かぐや姫なりきりセットも灯りが入ることで幻想的なオブジェとなり、多くの人が中に入

り写真を撮っていた。18 時から 21 時と短い時間ではあったが訪れた多くの方に幻想的な風景を楽しんでいただいた。

４．環境教育実践センター流しそうめん

環境教育実践センターの活動を知ってもらうために行った流しそうめんには農業の免許取得に興味のある学生だけでなく野菜の栽培に興味関心のある学生も訪れた。当日は流しそうめんだけでなく、収穫した野菜でピザを焼いたり、有志によるミニコンサートが催されたりして、おいしく、楽しく、心身ともに満足するイベントとなった。

５．京都聴覚障害児放課後等デイサービス「にじ」ワークショップ実施

竹友会でワークショップ形式のものづくりは何度かしてきたが、聴覚障害を持っている児童に対してのワークショップは初めて行った。準備段階での簡単な手話の取得や、ワークショップでどのようなものを作るか試行錯誤した。竹の玩具を作るにしても材料の準備や年齢がばらばらであるため、どの年齢の児童でも楽しんで作ることができる題材を選ぶのに悩んだ結果図画工作の題材に近い竹のオブジェを作ることにした。

６．城陽緑化フェスティバル

城陽緑化フェスティバルでは近畿大学 FeeLink と協力して竹ブランコ設営を行った。（写真 21）今年３月にも同じように木津川運動公園のイベントで竹ブランコを出展したが、好評だったため竹ブランコを目当てに訪れた方も多かった。近畿大学 FeeLink は食農教育やビオトープづくりなど環境問題に取り組む団体で竹林整備なども手掛けている。そのため、お互いの活動を知る良い機会となった。

写真 21

７．藤陵祭竹ブランコづくり

去年に引き続き藤陵祭で竹ブランコを出展した。本年度は３日間出展し、延べ約４５０人が竹のブランコを体験した。初日、２日目は誘導の問題もありあまり客が来なかったが学園祭実行委員の協力もあり、２日目の後半から３日目は途切れることなく多くの方に乗っていただいた。（写真 22）

写真 22

８．ミニ門松づくり

２年目となるミニ門松づくりを今年は４回行った。対象が中学生、留学生、大学生、子どもとお父さんお母さんを相手にするためばらばらであったが、どの年代の人でも楽しく門松について知ってもらい作ってもらうために授業づくりを工夫した。教育実習を経験した３回生がメインとなり授業づくりを行ったほか、最初のミニ門松づくりが附属京都小中学校であったため、附属京都小中学校の技術の先生と綿密な打ち合わせができたことも授業づくりがうまくいった要因であると考える。今回はアンケートを実施しておらず明確な数字で振り返りができていない

が、前年度の門松よりも折り紙やミニ凧を装飾で飾ることによりアレンジの幅が広がり、大人も子供も楽しめるミニ門松づくりにすることができた。(写真23) また、しめ縄づくりは学校でするが門松づくりをすることはないため、小学生、中学生を対象にしたミニ門松づくりではミニ門松づくりへの関心は高かった。

写真 23

９．門松作り

前年度実施した門松づくりは竹友会メンバーの技術の向上、日本文化である門松を作ることで体験的に学び、０からものを作り上げる楽しみに気付くことを目的に行った。本年度は前年度の目的に加え、門松のもつ多くの魅力伝えることに重きを置いた。門松づくりで伝えられるものは大きく３つある。門松の持つ歴史的な背景や植物の縁起、由来など文化的側面、植物をどこに植えるのか、マツやウメの枝ぶりを見てどこ切りどのように植えるのかなど造園的な美術的側面、のこぎりやハサミをどう使えば作業しやすいかなど技術的側面である。

附属学校での門松づくりでは、初めて身に着ける腰道具や初めて履く地下足袋に戸惑う生徒や、気が乗らないまま作業している生徒もいた。だんだんと自分たちの手で出来上がる門松を見ると真剣な顔つきとなった。附属桃山中学校では始業式の作り上げた生徒３人が全校生徒から拍手され、学校だよりにも大きく取り上げられた。後日、生徒に話を聞くと「実際に作り上げたときの達成感もすごかったが、拍手をされたり、友達や先生から門松見たよと言われたりすると恥ずかしい気持ちもあったが、それよりも達成感があった。」と門松づくりで達成感と充実感を得たという感想を聞いた。ものづくりをすることで高まるものは工具の使い方や知識、技能だけではない。作り上げることで今まではできなかったことができる喜びや達成感、自分にはこれだけのものが作れるんだという自信は心を豊かにし、新たなものづくりに取り組むためのきっかけとなる。また、作った門松を見てもらったりほめてもらったりすることで自己肯定感や自己効力感も高まる。普段作ることがない門松づくりをすることで、生徒たちに技術の授業では得られない体験をしてもらった。

府立園芸高校の門松づくりでは教えに行くというよりも教えられる場面の方が多かった。造園を専門に学んでいる生徒たちは男結びや樹木の剪定など門松づくりに必要なスキルをすでに持っており、竹友会のメンバーに教える場面もあった。附属桃山中学校と異なるのは府立園芸高校の生徒の技術レベルが竹友会の技術レベルとほぼ同じという点だ。しかし、門松の由来や作り方の手順などは経験してきた数が違うため、多くは教えず生徒が迷ったときに的確なアドバイスを送ることができた。一方的に教えるのではなく、教えあい、学び合うことができた。

附属学校、府立園芸高校での門松づくりは門松という題材を通して自分たちで作り上げることで得られる達成感や満足感、日本文化の門松を体験的に学ぶ機会を設けることができた。竹友会のメンバーの中には生徒とどのように接したらよいかわからないというメンバーもいたが、一緒に作り上げる過程で自然と会話が生まれ、生徒との距離が縮まっていった。ともに作る上げることで教えるだけでは得られない教えあい、学び合うことでものづくりの楽しさを伝えることができ、また生徒達からものづくりの楽しみをお互いに教え合うことができた。

藤森神社の門松は去年と同じく関西風の門松を作った。宮司の方や神社関係者の方に喜んでいただいただけでなく、藤森盆踊りフェスティバルなど地域のイベントで参加したことでつながった多くの方に見ていただいた。中には商店を営んでいる方もおり

「うちにも門松ほしかったよ。」と声をかけていただいた。

大学正門の門松はこれまでオーソドックスな門松ばかり作っていたため、思い切って変わり種の門松を作ろうということで竹を 10 本使った「大笑い門松」を製作した。使用する竹の本数が違うだけで固定の仕方や植栽の仕方など仕様が異なり苦戦する場面もあった。正門に飾ったため大学を通りかかった多くの人が足を止めて門松を見てくれた。

第４章　まとめと反省、今後の展望など

１．竹林整備

昨年度の竹友会としてスタートする以前は足を踏み入れることもできないほど雑木が生い茂っていた竹林も約２年間、人が手を加えて整備をすることで木漏れ日が地面にさし、風が吹き抜けるほどの空間が生まれ美しい竹林の景観ができつつある。しかし、間伐材をものづくりの材料として用いる一方で竹の穂先など使い道が見出すことができず、切り出したまま仮置きの状態となっている。また整理した雑木の運搬も毎月あるイベントに追われ処理できない状態が続いている。今後は、穂先の使い道なども検討していくとともに、雑木についても環境教育実践センターと連携して、破砕機にかけ、たい肥にするなど、作るだけでなく作った後の材料も循環できるような活動にしていきたい。

２．七夕イベント

流しそうめんは国際交流サークル FIRA の夏の活動で人気となっており、留学生の方も帰国する前のイベントで印象に残っているという声も聞く。七夕の笹飾りを学内だけでなく、地域と連携して飾る場所を増やしていきたい。特に笹飾りなどは小学校や児童館への需要が見込めるだろう。

３．環境教育実践センター流しそうめん

環境教育実践センターでの流しそうめんは毎年恒例のイベントのようになっており受講生だけでなく環境教育実践センターの職員の方からも好評をいただいている。今回は環境教育実践センターに興味を持ってもらいたいという思いから農業に興味のある学生に声をかけ参加してもらったが、環境教育実践センターをより多くの人に知ってもらうための活動を考えて実践していきたい。

４．藤森盆踊りフェスティバル

藤森盆踊りフェスティバルでは、竹灯籠単体でのライトアップにより多くの方に喜んでいただいた。竹を切り出して加工して、１つ１つを丁寧に作った竹灯籠が多くの人に見てもらい、多くの人が足を止めて見てくれるのを間近で見ることができて大きなやりがいを感じた。藤森盆踊りフェスティバル実行委員会の方からの評価も大変高く、来年もしてほしいと多くの方に声をかけていただいた。しかし、反省点として本殿西側の参道には竹灯籠を飾っていなかったため、「竹灯籠がどこに飾っているのかがわからなかった。」という声も聞いた。来年度の活動としては今年よりもさらに規模を上げて２つの参道を竹灯籠で飾るようにしたい。

５．京都聴覚障害児放課後等デイサービス「にじ」ワークショップ実施

当日の作業では竹の側面にきりで穴を開けることは児童にとって難しく、最終的に私達がインパクトドライバーを用いて穴を開けることとなった。楽しく工作ができたことはよかったが、竹の加工の体験をしてもらえなかったことは少なからず残念に感じる。事前に児童の様子を想定してリハーサルをしておくことで、改善策を考えておきたい。

６．城陽緑化フェスティバル

城陽緑化フェスティバルでは竹を扱う竹友会と環境教育や食農教育など幅広く自然を相手に活動している近畿大学 FeeLink が互いの活動を教えあい自然環境保全の大切さや、竹を使った遊びの楽しさを伝える活動ができた。竹友会の竹灯籠のつくり方や竹ブランコのつくり方といったノウハウを教えることで新たなつながりができた。反省点としては木津川運動公園やイベントの運営委員の方との綿密な連携が取れていなかったため、当日の動きで食い違いがあった。そのため、技術協力という形であれ参加する上で報告、連絡、相談を取り合うことが重要で

あると痛感した。

７．藤陵祭竹ブランコ

3 日間竹ブランコを出展し多くの方に日常では体験できない竹ブランコの体験をしていただいた。竹ブランコ自体は他にはない面白さがあり魅力的ではあるが誘導の仕方や宣伝不足もあり最初から終わりまで多くの人が途切れることなく竹のブランコに乗るといったことはなかった。竹のブランコを作り上げることも重要だが広報活動を充実させなければ乗る人がいないという現実を踏まえて、魅力をいかに多くの人に伝えるかが課題となった。

８．ミニ門松作り

中学生向け、留学生向け、親子向けのミニ門松講座を 5 回行った。去年のアンケート結果を踏まえて今年は折り紙を使った装飾を加えることでアレンジの幅を広げ、用意した植物だけでなく植物を取りに行きより植物のことを知ってもらうなど、工夫してミニ門松づくりに臨んだ。結果として多くの方にミニ門松づくりを楽しんでいただいた。しかし、回数が多くなったため材料の準備不足やスタッフの少なさが影響したため、満足のいく授業ができなかった時もあった。去年よりも授業内容が改善されている分、スタッフの対応や授業内容に無理がないか、材料の不足がないか、準備期間が適切に取られているかなど細かい部分まで配慮した授業ができるよう努めたい。

９．門松作り

2017 年度は 6 対の門松づくりを行った。その中でも附属学校、府立園芸高校に出向いて作った門松づくりは竹友会メンバーにとって印象深いものとなった。まず、これまで作ってきた門松を教えるという点で、技術を教える難しさを知った。一方で生徒にとって門松を作るというのは人生で初めてのことで、はじめは道具の使い方や植物の扱い方もままならないが、だんだんと出来上がる門松を見て、作業のコツをつかみ、主体的に考えて門松づくりに臨む姿が見えた。府立園芸高校での門松づくりでは生徒と一緒に門松を作り上げ、生徒にとっても、竹友会のメンバーにとっても門松を通してものづくりの楽しさを感じる活動となった。藤森神社、大学正門の門松づくりに関してはこれまで活動して磨いてきた技術を披露する、腕試しのような活動となった。1 年間竹を切り、加工して竹を通して学んできたものを存分に発揮した。門松は正月飾りの 1 つに過ぎないが、のこぎりで竹を切る、植物を剪定する、飾り付けるというものづくりに大切な要素が詰まっている。門松づくりを通して人とのつながり、ものづくりの大切さ、日本文化の奥深さを体験的に学ぶことができた。

今後の展望

竹を用いた活動も 2 年目ということもあり、作業やイベントの企画に慣れてきた。地域住民の方にも竹友会の名前が広く知れ渡り、多くの方からイベントの参加を持ちかけられるようになった。活動の幅を広げるため多くのイベントに参加したため人とのつながりや、企画の数は増えたが、依然としてメンバーが少人数のため作業量が非常に多くなった。また、中心メンバーは 3 回生が多く、後輩が少ない状況にある。活動を続けていくためにも後輩の確保とプロジェクト内容の引継ぎが急務となる。

＜参考・引用文献＞

参考・引用文献など